

# 「難聴者」の一般的イメージ 計量テキスト分析による検討

## Common Images of People with "Hard of Hearing" - A Quantitative Text Analysis

勝 谷 紀 子

### 要旨

本研究では、聴覚医学や特別支援教育の専門ではない大学生を対象に“難聴の人々”についての記述を求め、その内容の特徴について計量テキスト分析を用いて検討した。文章完成法によって得られた難聴の人びとについての記述を用いて計量テキスト分析を行った結果、ろう者や重い聴覚障害者を想定して回答したものと考えられる記述があることが明らかとなった。障害理解の促進の点から考察を行った。

キーワード：難聴 (hard of hearing) / しろうと理論 (lay theory) /  
計量テキスト分析 (Quantitative text analysis)

### I はじめに

正常な聴力を持つ人よりも聴力が低い難聴者は日常生活でのコミュニケーションに困難を感じる、必要な情報が得られにくいなど聞こえづらさによるさまざまな困難を抱えている（難聴者の心理学的問題を考える会，2020）。しかし、こうした困難は他者から目に見える形で観察することが難しく、難聴は“見えない障害”とも表現される。こうした難聴者に対して、一般的にはどのような概念がもたれているのであろうか。

本研究では、大学生を対象に“難聴の人々”についてどのような素朴な概念を持っているかを調査し検討した。素朴な理論、すなわちしろうと理論 (lay theory) とは、医師、科学者のように特定の分野に専門的な知識を持っていない一般の人々が、日常生活での直接のおよび間接的な経験をもとにして素朴な概念をさまざまな事物について持つことである (Furnham, 1988)。

勝谷 (2011) は、“難聴は”という言葉のあとに続く言葉を自由に記述する方法で「難聴のしろ

うと理論」を検討している。すると、回答内容としては、“耳が悪い”“耳が聴こえない”など難聴の特徴についての表面的な記述が多く見られていた。また、「大変」「不便」「かわいそう」「不自由」とネガティブな記述が多いものの、実際の記述内容をみるとその具体的内容に言及した回答は少なく、抽象的なレベルに留まっていた。その他、「会話ができない」など、ろう者や重度の聴覚障害者を想定したと思われる回答がみられていた。

本論文では、勝谷 (2011) と同じ調査参加者に対して回答を求めた“難聴の人々”についての記述内容の特徴について報告する。記述内容の分析の際には、分析手法としてテキストデータを分析する手法のひとつである計量テキスト分析 (樋口, 2004; 樋口, 2020) を用いた。

計量テキスト分析のメリットとして、テキストデータを手作業で分類・整理する場合に比べてテキストデータを主観的なバイアスの影響をおさえながら客観的に分析できる、テキストデータのうち少数の興味深い記述を見落とすことがない、といったメリットが考えられる。こうした手法を用いることで、専門家ではない人々が難聴を持って

いる人がどのような特徴を持つと考えているか、社会的なイメージや態度の内容をうかがい知ることができるのではないかと期待できる。

本研究では、難聴に関わる学問、すなわち、聴覚医学、特別支援教育、社会福祉学など難聴や聴覚障害に関わる専門的な知識がない大学生を対象として、「難聴の人々」についての記述を求めた。そして、記述内容にどのような特徴があるのかについて、計量テキスト分析の手法によって明らかにする。

## II 方法

**調査対象者と調査方法** 調査の方法、調査対象者と具体的な手続きは勝谷(2011)と同じである。首都圏の大学生338名(男性217名、女性114名、不明7名、平均年齢19.22歳)が質問紙に回答した。

**質問紙の内容** (1)難聴者のしろうと理論 難聴者についてどのように認識しているかを調べるために、文章完成法で「難聴の人や人びと」に関する自由記述を求めた。

具体的な教示としては、“難聴の人や人びとについて心に浮かぶことを記述してください。難聴の人(びと)は、どのような人(びと)であるのか、どのような行動をするのか、などについて自由に記述してください。”とし、“難聴の人(びと)”という言葉の主語とした文章をできるだけ多く簡潔な言葉で完成するように求めた。記述の時間は2分間として調査実施者が測定し、最大20文まで記述できるように回答欄を作成した。

デモグラフィック変数として、年齢、性別等にも回答を求めた(その他の項目にも回答を求めたが、本論文では分析の対象とはしないため割愛する。詳細は勝谷(2011)を参照)。

**分析方法** “難聴の人(びと)は”に対する記述についての分析は、次のように行った。

まず、記述を形態素に分け、どのような内容が記述されているか確認をおこなった。その際、書きかけなど単独では意味をなさない語、助詞、記号、英単語、数値を分析からはずした。また、“する”、“なる”、“ある”、“いる”といった単独での出現頻度は非常に多いものの一般的である語をはずした。さらに、誤字や脱字と判断される記

述を修正して表記を統一した。同じ意味で複数の表記がある場合(“きこえにくい”と“聞こえにくい”など)は、表記の違いを分析すること自体が本研究の目的ではないため、ひとつの表記に統一した。形態素の分析にはKH Coder(樋口, 2020)を用いた。

以上のような下処理を得た後に、難聴者に関する記述内容の分析を行った。具体的には、記述に含まれる後の記述数の集計、記述の内容分析を行った。記述の内容分析については、語の出現頻度、共起ネットワークによって分析を行った。

## III 結果

**記述の基礎統計** “難聴の人(びと)は”に対する回答がひとつでもあった回答者を分析対象とした。分析対象者の数は333名、平均記述数は3.97(標準偏差1.93)だった。

**記述に出現した語の頻度** “難聴の人(びと)は”に対する記述に出現している語の出現頻度を調べた。上位に出現した語についてTable 1に示す。

名詞では、手話、人、補聴器といった語が、動詞では聞こえる、使う、つけるといった語の出現頻度が高かった。形容詞については、多い、うまい、よい、形容動詞については、大変、かわいそう、普通、などといった語の出現頻度が高かった。

上位にみられた“よい”についての使われ方をみると、よく聞き返す、よく聞こえない、(口の動きなどを)よく見る、などという使われ方であった。形容動詞の“大変”についてみると、“大変そう”のような記述の他、コミュニケーションや生活が大変だという記述がみられていた。“普通”については、(発音等が)普通の人と違う、という記述もある一方、普通の人と変わらない、という記述もみられた。

### 記述に出現した語の共起ネットワーク分析

難聴者に関する記述に出現した語について、どのような共起関係があるのかを共起ネットワーク分析で検討した。これは、「データ中でよく一緒に使用される概念を線で結んでネットワークを描く方法」(樋口, 2020)である。分析対象の語について、最低出現頻度数を3として分析を行っ

た。その結果をFigure1に示す。

その結果、生活や大変や苦労といったまとまり、老人と年寄りからなるまとまり、かわいそうや難聴や口、見るといったまとまりが見いだされた。その他、耳、聞こえる、音、不自由、苦手、など聞こえるがそれを苦手とすることについての記述のまとまりが見られた。

#### IV 考察

本研究では、“難聴の人々”についての記述から難聴の一般的なイメージを探ることを目的とした。その結果、手話や補聴器といった名詞の出現が多く、多くの回答者はろう者や重い聴覚障害者を想定して回答したものと考えられる。今後は難聴者におけるしろうと理論も調べ、記述内容の違いを比較検討することも必要である。

共起ネットワーク分析からは手話に関わるまとまりがありろう者を想定する記述がみられたことがうかがえる。その他、生活、大変といったまとまりや耳、聞こえる、不自由、苦手といったまとまりからは聞くことができるもののその困難さのために生活などで苦労をすることに関わる記述がみられたことがうかがえる。その他、老人、年寄りというまとまりがみられたことから、老人性難聴にかかわる記述があることが示された。高齢者以外にも難聴者がいることについての知識を普及させる必要があるといえる。

その他、かわいそう、難聴、口、見るといったまとまりからはコミュニケーション上の困難を抱える難聴者へのネガティブなイメージがうかがえる。口元を見ることも対処の一つとして使われているが、難聴者がその他のどのような対処を行っていて不便さを補っているのか、障害理解が促されるような知識の普及も必要であると考えられる。

本研究の限界と今後の課題として、調査対象者が大学生のみであったことがあげられる。高齢者の回答との比較を通じて違いが明らかになることが必要である。さらに、最近のデータとの比較を通じて難聴をめぐる社会状況の変化を通じて記述内容がどう変わったのかについても検討も必要であろう。

#### V 引用文献

- Furnham, A. (1988). Lay Theories: Everyday understanding of problems in the social sciences. New York: Pergamon Press.
- 樋口耕一(2004). テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—理論と方法, 19, 101-115.
- 樋口耕一(2020). 社会調査のための計量テキスト分析 第2版 ナカニシヤ出版
- 勝谷紀子(2011). 難聴のしろうと理論. 日本大学文学部人文科学研究所研究紀要, 81, 123-130.
- 難聴者の心理学的問題を考える会(編)(2020). 難聴者と中途失聴者の心理学—聞こえにくさをかかえて生きる かもがわ出版

#### 〈脚注〉

- 2 本研究は、2011年の日本心理学会大会第75回大会で報告した発表内容をもとにして加筆・修正をしたものである。調査に際してご協力いただいた皆様方に記してお礼を申し上げます。また、本研究の実施にあたり、専修大学大学院(所属は当時)の小澤拓大さんのご協力を得ました。記してお礼申し上げます。

